

基礎学力を付ける検定

多様化する検定

ゲームソフトの人気商品からもうかがえるように、現在、さまざまな検定試験(以下、検定)が人気を博している。

従来から、検定は自己啓発的に取り組み、自分の知識やスキルのレベルを証明するものであり、進学や就職の際には自己アピールのひとつとして積極的に活用されてきた。厳しい雇用状況下においては、実用英語技能検定、秘書検定、簿記検定等、実務や雇用機会につながる汎用性の高い検定に人気が集まったが、現在では「京都・観光文化検定」や「江戸文化歴史検定」など、いわゆる「ご当地検定」など趣味・教養を深める検定が急増し、多くの受験者を集めている。

基礎学力を付ける検定

実務系、趣味系ともに、検定は特定の分野に関する自分の知識、スキル等のレベルを証明するものであり、合格すれば一定の自信も付く。また、級が何段階かに分かれていれば、不合格でも今の自分の実力が分かるため、一つひとつクリアして、さらに上を目指そうとする向上心を喚起し、ステップアップを促すことができる。そういった性質を持つ検定は、社会的に問題となっている学力低下を食い止めるための有効な手段として期待されている。既に学校教育に関連する検定が数多く立ち上がっており(資料参照)多岐に渡っている。

今回は、教育において検定がどのように活用できるのか、また、今後の展望などについて、小学校から高校までの学習科目に直結した検定を実施している日本漢字能力検定協会、歴史能力検定協会のご担当者にうかがった。

資料 小学校、中学校、高校の教科に関連した主な検定

教科	検定	実施団体	ホームページ
国語関連	日本語漢字能力検定	財団法人日本漢字能力検定協会	http://www.kanken.or.jp/index.html
	日本語文書能力検定	日本語文章能力検定協会	http://www.kentei.co.jp/bunken/index.html
	毛筆書写検定	財団法人日本書写技能検定協会	
	硬筆書写検定	財団法人日本書写技能検定協会	
算数・ 数学関連	珠算能力検定	日本珠算連盟	http://www.syuzan.net/
	暗算検定試験	日本珠算連盟	http://www.syuzan.net/
	全珠連珠算検定	社団法人全国珠算教育連盟	http://www.soroban.or.jp/
	全珠連暗算検定	社団法人全国珠算教育連盟	http://www.soroban.or.jp/
	実用数学技能検定	財団法人日本数学検定協会	http://www.suken.net/japan.html
	計算力・思考力検定	日本商工会議所	http://www.kentei.ne.jp/keisan/index.html
	電卓技能検定	日本電卓検定協会	http://www.dentakou.co.jp/
	数学能力検定	数理検定協会	http://www.suriken.com/
理科関連	理科学検定	日本理科学検定協会	http://www.rikagaku.org/
	子ども樹木博士	社団法人全国森林レクリエーション協会	http://www.shinrinreku.jp/kodomo/main.html
	ファール検定	ファール検定事務局	http://www.fabre-ken.com/
社会関連	緑・花文化の知識認定試験	財団法人公園緑地管理財団内「緑・花文化の知識認定試験」事務局	http://www.madori-hanabunka.jp/
	歴史能力検定	歴史能力検定協会	http://www.rekiken.gr.jp/
	旅行地理検定	旅行地理検定協会	http://www.jtb-hrs.co.jp/tgta/
英語関連	時刻表検定	時刻表検定協会	http://www.jikokuhyo.gr.jp/index.html
	実用英語技能検定	財団法人日本英語検定協会	http://www.eiken.or.jp/
	児童英検	財団法人日本英語検定協会	http://www.eiken.or.jp/jr_step/
	JAPEC児童英検	日本児童英語振興協会	http://shikaku.kodomo-jiten.com/gaikokugo/gaikokugo2.html
家庭科関連	TOEIC Bridge	財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	http://www.toEIC.or.jp/bridge/index.html
	家庭料理技能検定	学校法人香川栄養学園家庭料理技能検定委員会	http://www.eiyo.ac.jp/fuzoku/shogai/
	食物調理技術検定	財団法人全国高等学校家庭科技術検定委員会	http://www.katei-ed.or.jp
	被服製作技術検定	財団法人全国高等学校家庭科技術検定委員会	http://www.katei-ed.or.jp
	毛糸編物技能検定	財団法人日本編物検定協会	http://www.amiken.or.jp
	ベジフル検定	日本ベジタブル&フルーツマイスター協会	http://www.vege-fru.com/
情報関連	タイピング技能検定	イータイピング株式会社	http://web.e-typing.ne.jp/
	パソコン基礎検定試験	財団法人 全日本情報学習振興協会	http://www.joho-gakushu.or.jp/

参考：YAHOO!きっず(http://dir.kids.yahoo.co.jp/School_Bell/Certification_Tests/)
 情報通信時代の資格検定ガイド(<http://f3mxu.wisnet.ne.jp/licence/>)
 毎日検定/バンク(<http://www.mainichikentei.jp/>)

日本漢字能力検定

今や日本最大規模の検定といっても過言ではない日本漢字能力検定。2006年度は志願者数260万人に届きそうな勢いとのこと。その普及の背景とは。財団法人日本漢字能力検定協会東京事務局次長の多和泰美氏にうかがった。

多和泰美 氏

Tawa Yasuyoshi

財団法人日本漢字能力検定協会東京事務局次長



日本漢字能力検定の歩み

- 1975年 4月 京都を本部として協会設立
- 11月 第1回日本漢字能力検定 実施
- 1992年 6月 文部省認定の資格となる（平成13年1月6日に文部科学省に統合）
- 1997年 年間志願者数100万人突破
- 2002年 4月 漢検CBT（コンピュータ上での本試験）開始
- 年間志願者数200万人突破

漢検が日本最大規模の検定になった理由

日本漢字能力検定（以下、漢検）は1975年にスタートし、既に30年以上の歴史がありますが、どのようにして浸透してきたのでしょうか。

多和 漢検が世の中に浸透し始めたのは1992年に当時の文部省に認定されたころからでしょうか。その年以降は、志願者数が急激に増加し、今では、年間志願者数が日本最大規模の検定となっています。

現在の志願者数はどのくらいですか。

多和 2005年度は240万人を超え（次頁・資料1参照）、今年度は260万人に届きそうな勢いとなっています。

なぜこれだけ急に規模が拡大したのでしょうか。

多和 大きな要因として、2つ挙げられます。1つ目は、日本社会の「IT化・産業構造の変化」、2つ目は、「人口構造の変化」で

す。「IT化・産業構造の変化」によって、人々のコミュニケーションのあり方が大きく変わりました。一言で言えば、書き言葉の大量受発信時代となりました（日本語の書き言葉の大半は漢字なのです）。

2つ目の「人口構造の変化」とは、少子化が進み、18歳人口が減少したことです。

その一方で、近年大学数が増加していますので、選ばなければ実質誰でも大学に入学できるようになりました。結果的に、過去と比較するとそれほど努力しなくても大学に入学できるようになり、大学入学が学習目標のハードルとして機能しなくなったことによって基礎学力の低下が起きました。語彙力が中学生レベルとなり論文が読めない大学生も頻出しているようで、これは社会問題化しています。

「IT化・産業構造の変化」によって、コミュニケーションのあり方が変わったとは具体的にどのようなことでしょうか。

多和 かつて、農業などの第一次産業が中心の時代においては、人と人の対話（コ

ミュニケーション）というのは、地縁、血縁に代表される、経験、背景、価値観の似た人たち同士が共通了解のある中で行う少数対面型のコミュニケーションでした。こうした時代には、互いの意思疎通はたやすく、場合によっては言葉すら必要ないほどでした。その後、第二次産業が中心の時代になり、以前よりはコミュニケーションの幅が広がるものの、それでもまだ決められた作業工程を気心の知れた人々と共に仕事を進めることがほとんどでしたので、コミュニケーションはそれほど困難ではありませんでした。ところが、情報革命後の情報・サービス社会におけるコミュニケーションは大きく変化しました。さまざまな年齢・立場の、いろいろな背景や価値観を持つ人々がかかわり合っただけで新たな価値を生み出しながら仕事を進めていかなければならなくなったため、初対面の人と一緒に仕事を進めたり、地域や業界といった境界を飛び越えての仕事が普通となりました。そこで求められるのは、共通了解がほとんどない中での多数非対面型

の対話を中心とするコミュニケーションです。自分の意見や主張を正確に相手に伝え、また相手のそれを正確に理解しなければなりませんので、道具としての「言葉」の重要性が飛躍的に増したわけです。

しかも電子メールが日常的に使われている現在、書き言葉が大きなウエイトを占めるようになってきました。

多和 その通りです。IT化が進み、書き言葉の大量受発信時代になって、読み書きといった基礎言語能力の必要性が急激に増大しました。

ところが、前述したように、一方では少子化が進み、18歳人口も減少しています。平成17年度の高校への進学率は97.6%、大学の進学率は51.5%です。先般文部科学省が発表した通り、2007年には「選ばなければ誰でも大学に入れる」ようになります。必然として、ごく一握りの上位大学以外の大学は、入学難易度が低くなり、それによって大学に入学するということを目標とした学習動機が生まれにくくなっています。以上のような構造変化から、学生全体の基礎学力、ひいては基礎学力の根幹を成す基

礎言語能力が低下していると考えられます。また、大学側が受験生の負担を軽減し、志願者を増やすために入試科目を絞っていることが学生の基礎学力低下にさらに拍車をかけているとも伺います。

つまり、コミュニケーションのあり方の変化によって、基礎言語能力の必要性が高まっているにもかかわらず、実際にはその能力が総じて低下したために、そのギャップに対して危機感が生まれたのです。その危機感の広がり、漢検の受験志願者を急増させていると考えられます。

漢検の特徴と有効性

どのような方が受験しているのでしょうか。

多和 全体の95%が、児童・生徒・学生です(右頁・資料2参照)。社会人の受験も徐々に増加しています。

先ほど、基礎学力およびその根幹を成す基礎言語能力に対する危機感が受験者を増やしていると述べましたが、受験者個人を見てみると、身近にいる親や先生の熱意・

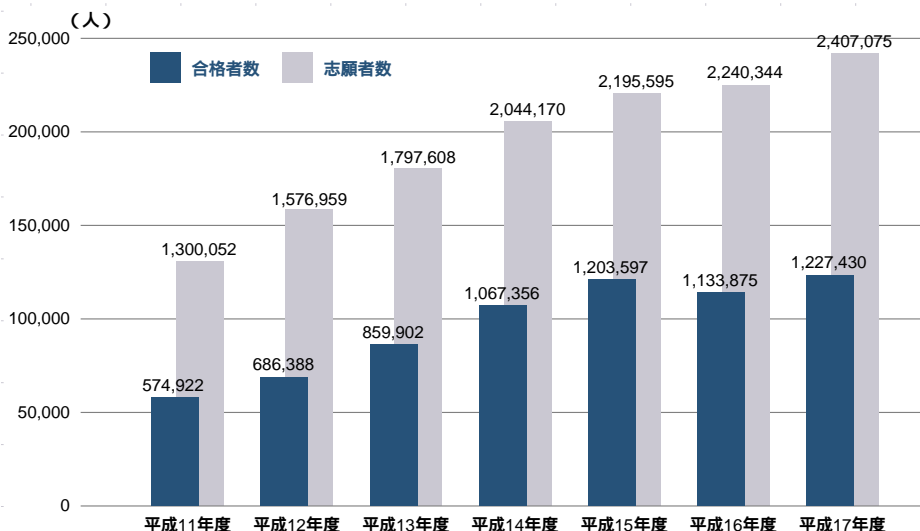
危機感の高さが、児童・生徒の受験動機を形成する大きな要因になっているようです。一定の基礎教養のある大人にとっては常識ですが、「日本人なのだから、日本語や漢字はできて当たり前」ではありません。「日本人でも、訓練しないと日本語や漢字は身に付かない」と考える教養のある親や先生が、漢検の受験を積極的に勧めていると伺います。

よく若者の日本語能力の低下が問題視されますが、それほど深刻なのでしょうか。

多和 非常に残念なことです。大変深刻だと言わざるを得ません。近年、日本語が分からなくて大学での授業が成り立たない、会社では仕事にならない、といったお声は各方面から伺います。例えば先生が「恣意的に解釈せずに…」と説明すると、「シーテキって何? A的、B的、C的?」などと真面目に質問をする学生も、少なくないようです。あるネット証券会社では、基礎言語能力の高低が企業のコミュニケーションコストを決定付けるとのお考えから、顧客接点部門の社員全員に漢検受験を推奨しています。これは、その企業の役員の方から伺ったお話ですが、顧客対応をする際に、1回のメールで件を正確に伝えることができればそのコミュニケーションコストは1で済むそうです。しかし、伝え漏れがあれば、再度メールを作成し直す必要があります。さらに、メールの内容が不明確なためにクレームに発展してしまうと、その対応のためのコミュニケーションコストは、最初のメール送信時の10~20倍にもなるそうです。このように、一つコミュニケーションロスが発生すると、その収束のために要するコミュニケーションコストは数十倍になるとおっしゃっていました。

基礎言語能力を身に付けるために漢検が利用されているということですが、漢検の特徴とは。

資料1 志願者・合格者数の推移



出所：財団法人日本漢字能力検定協会ホームページ(<http://www.kanken.or.jp/frame/a01.html>)

多和 漢検の特徴のひとつは、スモールステップで12階級も段階が設定されているために、受検者は目標が設定しやすく、しかも努力によりその目標がクリアしやすいことです。つまり、「やればできる」という自己肯定感が生まれて自分に自信が持てるようになるのです。自分に力が付いたことを実感できるので、一度受けると、面白くなってどんどんと自ら進んで学習をするようになるようです。

漢字の勉強は、自習が基本だと思いますが、その目標として受検者は漢検を位置付けているということでしょうか。

多和 1つはそうした側面があります。ややもすれば、漢字学習は単純反復の無味乾燥な訓練になりがちです。それを継続するための動機付け、またガイドラインとしても有効だと思います。私たちは、単に漢字を読み書きできるということではなく、文脈の中で活用できる漢字能力を身に付けることが重要であると考えています。漢検の正式名称が「日本漢字能力検定」となっているのも、このためです。

読書離れと言われて久しいですが、やはり、言葉を知らないと、読書は途中で投げ出しがちになってしまいます。読書習慣を促進するためには、漢字の活用力を高め、読書への敷居を低くする必要があります。読書の敷居を下げるための一つの手段としても漢検は有効です。

受検志願者の95%が児童・生徒・学生ということでしたが、児童・生徒・学生にとって漢検を受検する直接的なメリットとは。

多和 本質的には、一生役立つ基礎言語能力が身に付く、というのが一番大きいです。しかしながら、目前の直接的なメリットとしては、大学入試や高校入試での数多くの優遇・評価です。特に大学や短大では、全国の476校997学部で入試の優遇・評価がな

されています。高校も同様で、入試において優遇・評価しているところが全国で745校、漢検合格を単位として認める高校は全国に776校にもものぼります。

さらに漢検の受検動機を調べてみると、受検者の約2割が「就職に有利」と回答しています。入社までに全員に漢検2級取得を義務付けている民放キー局などをはじめ、最近では、多くの企業で、漢検を入社や昇格条件として活用されています。漢検2級を取得していることが、社会人相応の基礎言語能力を身に付けている証明になっているようです。

漢検を受けると、さまざまな教科の成績も良くなるのですか。

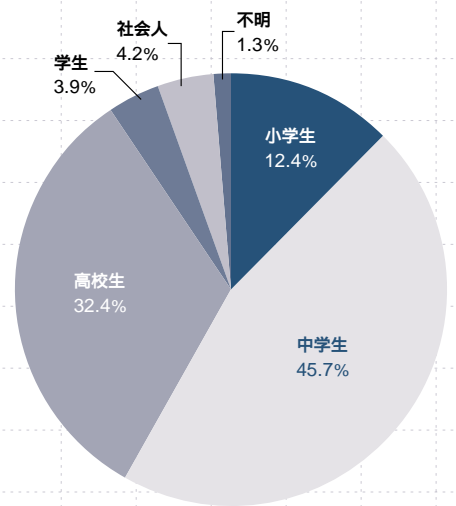
多和 漢字はすべての教科の基本です。語彙が増えれば、読解力も向上し、すべての教科で学力向上が期待できると思います。日本語の語彙はその大半が漢字によって構成されています。昨年9月に東京都千代田区立九段中等教育学校が、漢検の成績と国語・数学・英語の実力試験の成績との相関関係を調査しました。その報告書を見ますと、国語や英語だけでなく、数学に至っても、漢検の得点と実力試験の得点とに強い正の相関関係があることが分かりました。漢字能力があると、数学の設問の文脈をきちんと素早く把握できるからだろうと伺っています。

漢字の効果的な学習方法

漢字の効果的な学習方法を教えてください。

多和 やはり鉛筆を持って実際に書くことが、何より一番よい方法だと思います。人間の脳の働きという視点で見ると、パソコンや携帯電話で文字を書いても、脳は働いていないそうです。ところが、手で文字を書くと脳

資料2 受検志願者の割合(平成17年度)



出所：財団法人日本漢字能力検定協会
「平成18・19年度漢検の手引き」

が働く。脳が働くと人は覚えると言います。したがって、まず手で書いて、脳を使って漢字を覚え、次にその単語を読んだり書いたりしながら文脈の中で使う訓練をする。これを繰り返すことが、漢字学習の一つの「型」でしょう。しかも、目標としている級に合格すると自信が付き、次の目標に向かうようになります。そこでまた訓練を積む。このような好循環に入ることが、理想的であると考えます。

12段階の級分けということですが、一般的な目標はどのように考えればよいのでしょうか。

多和 私たちは、小学校卒業時に5級、中学校卒業時に3級、高校卒業時に2級と明示しています。これは学習指導要領に完全に準拠しています。現在(平成18年度第2回8月までの協会調べ)、漢検の団体受検実施率は全国の中学校で78.6%、高校で84.6%に及び、先ほども述べたように多くの中学生、高校生が挑戦していますが、現実には、この各段階の目標級を取得した上で卒業する生徒はあまり多くありません。各段階相応の漢字能力を身に付けていただく

ことが、協会の当面の課題であると思っています。

いつごろから漢字学習を始めれば良いのでしょうか。

多和 早ければ早い方が良いと思います。到達目安としては、小学校卒業時に5級、中学校卒業時に3級、高校卒業時に2級です。成長段階に応じて必要な級を取得すれば良いと思いますが、仮に高校卒業までに2級に到達できなかった場合でも、社会に出るまでには到達しておく方が良いのではないのでしょうか。

大人になってからでは、漢字学習は手遅れなののでしょうか。

多和 いいえ。これは、東京大学や慶應義塾大学の先生方から伺ったのですが、海外から日本に来ている留学生は、最初のうちは日本語がほとんど分かりませんが、1~2年もすると日本人学生よりも上手なくらいに日本語を読み書きし、もちろん話せるようになるそうです。つまり、大人になってからも語彙力・要約力・構文力を体系立てて学べば、訓練次第でいくらでも漢字能力や日本語能力は身に付けられるのです。現に、社会人の方でも漢検への挑戦を楽しみにして何度も受検される方も多いようです。

漢字の学習法は「手で書く」ということでしたが、そうはいつでも今の時代、ITを上手く活用した学習方法はないのでしょうか。

多和 インターネットを利用した漢検の学習システム「challenge漢検」というものがあります。これはインターネット環境があれば、自宅でも、学校の教室でも漢検の学習ができるシステムです。また「漢検CBT(Computer Based Testing)」というコンピューターで漢検を受検できるシステムもあります(「challenge漢検」およびCBT公開会場については財団法人日本漢字能力検定協会ホームページ参照)。例えば、学校でこのシステムを導入

すれば、毎日漢検を実施できるようになります。これらは学校や塾のような団体向けのシステムですが、個人用の学習機器としてニンテンドーDS対応のソフトが2種類発売されています。個人がいつでもどこでも、ゲームを通して漢検のトレーニングができるソフトで、かなり人気があり、空前の出荷本数になっているようです。ニンテンドーDSはタッチスクリーンで漢字を書けますから、手書き感覚の良さもあるのかも知れません。

漢検の今後の展望

漢検の今後の展望についてお聞かせ下さい。

多和 受検志願者数については、今後、短期的には350万人を超えていくのではないかと思います。これは実務技能検定の中で単一検定が過去最大だった時とほぼ同じ規模です。さらに、これからの時代のすべての児童・生徒・学生にとって必須の能力資格ですので、中長期的に見れば、年間500万~600万人も不可能ではないと思っています。それ位の規模になった時には、社会全体の基礎学力や基礎言語能力が今よりも再生された状態になっているのではないのでしょうか。

私たちには、「漢検の合格という成功体験を経て自分に自信を持ち、自己肯定感を持つとともに、社会に出たときに必要になる基礎学力や基礎言語能力を身に付けた人を増やしたい」という思いがあります。その観点から、単に受検者が増加するだけではあまり意味がないと考えています。今後の目標は、まず小学校卒業時に5級、中学校卒業時に3級、高校卒業時に2級にきちんと合格できる人を増やすことです。

昨年、日本を代表するような基幹企業の社長や会長にご協力いただき、「基礎学力」や「基礎言語能力」に関するコメント

を頂戴し、その内容をホームページで発信しています。あるメーカーの社長は、社会人として必要な基礎学力・基礎教養として、歴史を学ぶことを第一に掲げられ、そのためにも基礎言語能力を高めることが重要であるとおっしゃっていました。つまり、漢字をはじめとする語彙力は、何を学ぶにしてもその基礎として必要不可欠であり、それだけに学習投資効果が大きいと言えるでしょう。

基礎学力、基礎言語能力の低下の問題は、「少子化」、「ハードル無き大学の進学率上昇」、「脳を使わない便利ツールの発達」等により、社会全体の構造的な問題となっています。子どもたちに限らず、多くのビジネス人も短期的思考、単純思考に陥り、対処療法に終わっているというのは、多くの経営者の悩みでもあります。その解決のために「基礎学力」、「基礎言語能力」、「基礎教養」の重要性を世の中に問い、子どもも大人も、「基礎学力や基礎言語能力、教養がないと恥ずかしい」という世論を再興する必要がありますかと思えます。日本の将来を担う子どもたちや若者が、「基礎学力が備わりコミュニケーション能力が高い人」、「自ら高い目標を掲げ、それに向けて努力し、実現することができる人」に成長する手助けをすることが、協会の社会的使命であると考えています。

 財団法人日本漢字能力検定協会ホームページ
千代田区立九段中等教育学校『相関関係定
量調査』
http://www.kanken.or.jp/kyouiku_joho/index.html
・経済産業省ホームページ「社会人基礎力」について
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>
・OECDホームページ「DESECO」について
<http://www.portal-stat.admin.ch/desecco/index.htm>

読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。
h-bunka@lec-jp.com

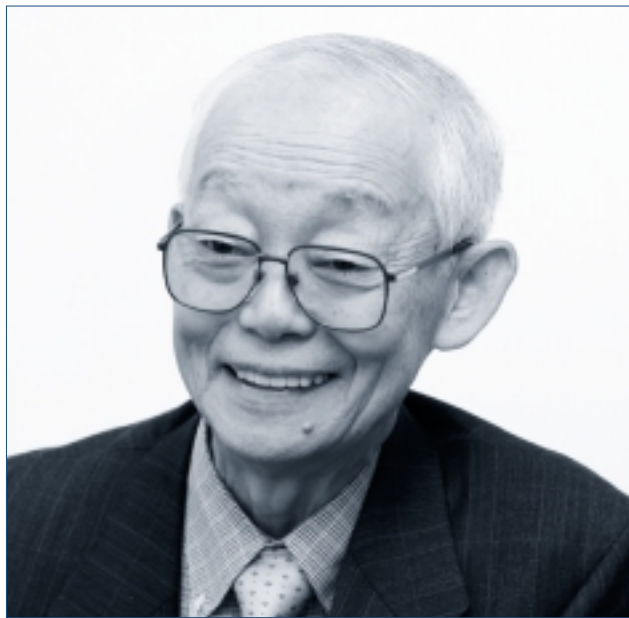
歴史能力検定

10年前にスタートした「歴史能力検定試験」の受験者が増加している。その背景には何があるのか。歴史を学ぶ必要性、意義はどこにあるのか。歴史能力検定協会会長で主催の財団法人社会教育協会理事長の黒水恒男氏にうかがった。

黒水恒男 氏

Kuromizu Tsuneo

歴史能力検定協会会長 / 財団法人社会教育協会理事長



1932年旧朝鮮・京城(現韓国・ソウル)生まれ。1950年小倉高等学校卒業、朝日新聞社入社。1951年京都大学文学部入学。1956年京都大学文学部卒業、株式会社電通入社。営業部長、広報室長を経て1989年株式会社電通PRセンター代表取締役社長。1990年社団法人日本パブリックリレーション協会理事長。1995年株式会社電通PRセンター相談役。1996年社団法人日本パブリックリレーション協会顧問。1997年日本広報学会理事。1998年財団法人社会教育協会理事長(現職)、1999年歴史能力検定協会会長(現職)。

もともとはシルバー世代を想定してに立ち上げた

歴史能力検定試験(以下、歴検)を立ち上げた経緯についてお聞かせください。
黒水 まず、財団法人社会教育協会では何らかの検定試験を立ち上げようと考えたのは、今から10年以上前のことです。当時、そのテーマについては2つの案がありました。1つは環境教育、もう1つが歴史教育です。なぜ最終的に歴史になったかといえば、日本の歴史教育がとても中途半端で、特に明治以降、「国にとって都合の悪いことは教えない」という歪みを感じていたことが大きな要因だったと思います。そのためもあってか、この試験の立ち上げには抵抗もありました。そして「あくまで社会教育の一環としてやっていこう。学校教育にはタッチしない」という考えで1997年にスタートしたのが「歴史認定試験」です。

当初は「検定」試験ではなかったのですか。

黒水 立ち上げ当初は、試験の対象は「シ

ルバー世代」になると目論んでいました。ところがいざ蓋を開けてみると、1997年の第1回目の試験の受験者数は約4,000人だったのですが、受験した人の多くはこちらの予想とは全く異なり、10代、20代の若い人たちだったのです。歴史が好きで興味を持っている人というのは、若い人の中にも一定数はいたということでしょうが、意外でした。

その後の1999年、受験者数が伸び悩んだこともあり、「認定試験」をやめて、可否結果がある「検定試験」に変えました。今度はターゲットもシルバーではなく学生をターゲットにしました。それでも2年ほどなかなか受験者数は伸びず、そろそろ撤退か、と考え始めたとき、2001年に年間約1万5,000人というところまで受験者数が急増したのです(次頁・資料1参照)。

なぜ急に受験者数が増え始めたのでしょうか。

黒水 はじめから全国各地の教科書販売会社のご協力を得て、もっぱら中学の先生方にお勧めしていたのですが、その効果がジワジワと出てきたのだと思います。そして、

先生方が口コミを通して歴検を知り、その良さも伝わって学校単位で受験するという方式が急に増えたのです。

試験の現状は。

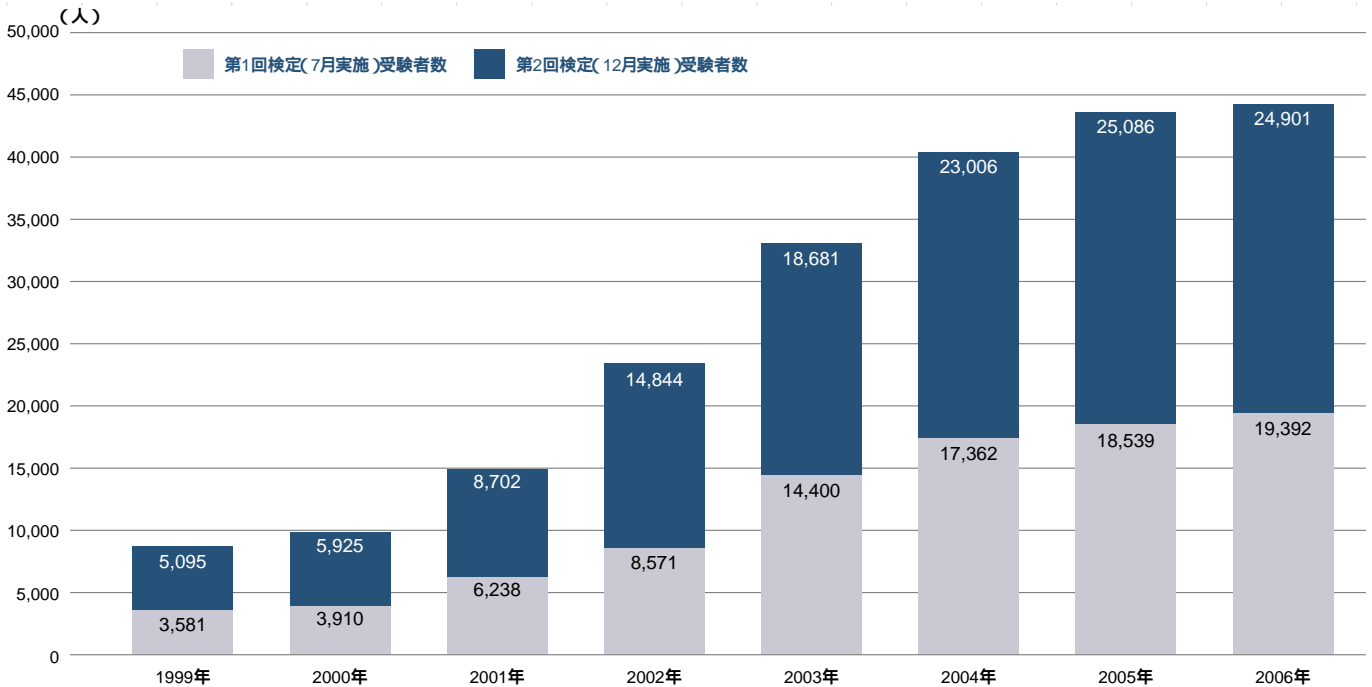
黒水 試験の科目は日本史と世界史で1級から3級まで、それに区別のない14級だったのですが、今はそれに準3級と5級が加わっています(次頁・資料2参照)。級を増したのは先生方からの要望があつてのことです。そのようなこともあり、2006年には年間受験者数が約4万4,000人というところまで来しました。受験者の約9割は10代で、ほとんどが中学生という状況です(45頁・資料3参照)。

進路選択に最適な歴史教育

歴史を学ぶ意義についてはいかががお考えですか。

黒水 最近のグローバル化時代にかかわらず、日本人は歴史を学ばない民族ではないでしょうか。それに比べて欧米人

資料1 受験者数の推移



出所：歴史能力検定協会資料

資料2 級の内容

1級(日本史・世界史)

公開会場でのみ、年1回(12月検定のみ)実施。学校での学習にとらわれない広い範囲から出題されます。出題形式も4肢択一問題をはじめ、記述・論述問題などがあります。

2級(日本史・世界史)

公開会場または日曜日準会場(公開会場と同日)で実施。出題されるテーマは高校で学ぶ程度のもので、比較的高度な歴史知識が要求されます。自信のある方向向けの試験です。また記述問題も出題されます。

3級(日本史・世界史)

高校で学ぶ基礎的な歴史知識を問う試験です。社会人や高校生が自分の歴史知識を試すのに最適です。

準3級(日本史)

準会場でのみ、年1回(12月検定のみ)実施。中学校で学ぶ程度の歴史知識を基本としながら、それにとらわれない範囲からも出題されます。準3級は「世界史」の科目はありません。

4級(歴史基本)

中学生程度の知識があれば、楽しく受験できます。

日本史と世界史を一つにした試験で、歴史の常識問題が出題されます。

5級(歴史入門)

公開会場では年1回(7月検定のみ)実施。準会場では年2回とも実施可。小学校修了程度の基本的な日本史の問題が出題されます。小学生や中学生が自分の歴史知識を試すのに最適です。

3級以上は、日本史・世界史それぞれ別個の試験。

出所：歴史能力検定協会ホームページ
(<http://www.rekiken.gr.jp>)

など他国の人は、歴史をよく学びます。驚かされるのは、国際的なパーティーなど、外国の出席者は、たいがいきちんと日本はもちろん世界の歴史を勉強しています。日本人は、全く太刀打ちできないほどで、これは悲しい現実です。特にこれからのグローバル

時代は教養としての歴史を知ることが必須でしょう。歴史を知ること、今の自分を知ることであり、これから先の世の中を考えるために必要な知識なのです。

小中学生が歴史を学ぶ必要性とは。

黒水 昨今、将来の目標や自分の進路を

決められない若者の増加が社会的に問題視されています。その解決策のひとつとして、歴史教育が大きな役割を担っていると考えています。具体的には、知的好奇心が旺盛になる小学校高学年から中学校時代に、自分の人生の目標となるモデルに出会

資料3 受験申込者内訳

受験申込者の職業別割合

	小学生	中学生	高校生	専門学校生	短大生	大学生	会社員	公務員	団体職員	教師	主婦	自営業	自由業	その他	不明	合計
2004年度	0.6%	80.7%	6.4%	0.4%	0.1%	4.2%	2.3%	0.7%	0.1%	0.4%	0.3%	0.2%	0.3%	1.2%	1.9%	100%
2005年度	0.7%	78.9%	7.0%	0.3%	0.1%	4.1%	2.5%	0.8%	0.1%	0.4%	0.4%	0.2%	0.3%	1.1%	3.0%	100%

受験申込者の年代別割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	対象外	不明	合計
2004年度	90.5%	5.5%	2.1%	1.1%	0.4%	0.2%	0.1%	0.1%	0.0%	100%
2005年度	90.2%	5.4%	2.3%	1.3%	0.5%	0.2%	0.1%	0.2%	0.0%	100%

受験申込者の男女別割合

	男	女	合計
2004年度	61%	39%	100%
2005年度	62%	38%	100%

出所：歴史能力検定協会資料

うことが、自分の将来を考える場合とても重要なことだと思うのです。したがって大人は子どもたちに、そのモデルのヒントを与えなければいけません。しかも、可能な限り広い視点に立ったヒントです。その材料として歴史は最適です。何せ歴史は、それまでに実際にあったこと、存在した人物が、地球規模で登場するわけですから、手本には事欠かないというわけです。

しかし現状の教育を見ると、歴史は単なる暗記の勉強になっていて面白くない。しかも受験のための単なる選択科目のひとつに過ぎません。したがって、選択をしない生徒にとってみれば、まとも勉強する機会もない。しかし歴史は、「読み書きそろばん」と同様、すべての学問の基盤になるものなのですから、私は歴史教育を必修にするべきだと思います。東京大学教授の山内昌之氏は最近の朝日新聞で「歴史の出来事に通じるなら、他の国や人との付き合いの中で、他者に対する寛容と自分への自信とのバランスのとれた姿勢を培うにちがいない」と述べています。

歴史能力検定試験は、歴史を学ぶための1つのきっかけになっているのが現状なのでしょうか。

黒水 そう思います。歴史能力検定試験2級の最年少合格者の小学生は最初、『まん

が日本史』から歴史に興味を持ち、勉強をスタートしたそうです。面白いのは、彼は歴史上の出来事を、いかにも自分が見た出来事であるかのように話をするのです。彼の中では、歴史は暗記の勉強ではなく、人間ドラマとして脳の中に納まっているわけです。

グローバル時代だからこそ必須の学問

国に対しての要望はありますか。

黒水 戦後の日本は、経済至上主義的になってしまい、歴史や文化といった何か大事なものを置き忘れたまま、ここまで来てしまったと思います。歴史教育にしても、まずはきちんと事実を教え、それを伝えていくことをしなければ、次の時代の進歩はありません。靖国参拝問題にしても、安易に善悪を議論するのではなく、まず国民全体が歴史認識をきちんと持つべきでしょう。もっと真摯な態度をとって欲しいと願います。歴史は、これからのグローバル時代にこそ必須の学問です。歴史を知らない日本人は、世界では通用しません。

現在、歴検の1級、2級合格者は、高等学校卒業程度認定試験の科目免除になりますし、いくつかの大学では、入学試験の科目免除にもなっています。しかし、それだけ

ではなく、例えば今後、大学入試では歴史を必修科目としたり、学校の指導者が手薄であれば、もっと社会人から歴史の教員を起用したりと、国には歴史教育のシステムを根本的に見直すようなことを考えて欲しいと思います。

今後どのような展望をお持ちでしょうか。

黒水 歴史能力検定試験としては、やはり「受験して良かった」「もっと勉強しよう」と、知的好奇心の刺激になり、やる気を触発するような面白い問題づくりに力を注いでいきたいと思っています。

また学校の先生の要望を受けて、級の新設や、受験料の値下げにより、誰でも受験しやすい環境づくりをしていきます。小学生からの受験者を増やしながら、近い将来受験者数を年間10万人以上にしていきたいと考えています。歴史に対する日本人の認識を変え、世界で活躍する人を増やすように今後も努力していきたいと思っています。



読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。
h-bunka@lec-jp.com